令和５年１１月１０日（金）

足の裏にきく

今回は、高校教師などをつとめた詩人である「坂村真民」さんの「足の裏にきく」の一節を紹介します。

ある朝、足の裏にきいてみました。
足の裏よ、お前はかなしくはないかい。いつもきたない所ばかりをふんでいて、腹のたつことはないかいと。
すると足の裏が微笑して答えました。
腹のたつなんて、とんでもないことです。そんなことを一度も思ったことはありません。考えてごらんなさい。体のなかでわたしは一番幸せ者ですよ。なぜなら、何万年何億年とつづいてきている地球と、いつもじかに接しているのです。ありがたいものだといつも感謝こそすれ、不平に思ったことはまったくありません。